

9月25日(木)

おはようございます。

先日、朝礼で学園長先生がおっしゃいましたように、校祖平岡岩峯先生が23歳から37歳の時まで14年間師事された江間俊一先生という方のお供養を、春と秋のお彼岸にずっと続けてきまして昨日で100回目になりました。岩峯先生はこの方に複式呼吸の仕方を教わったのですが、他にもいろいろなかたちでご指導を受けたので、その恩に感謝を示してきたのです。そういうことから私たちの学校はこの師匠の亡くなられた日、5月31日を創立記念日にしているのです。インターネットで江間俊一と検索すれば出てきます。

学園長もおっしゃっていましたが、継続することは大切です。ここに学ばなくてはならないことがあります。校祖はやはりただの人ではなかったと思うのです。諸君たちが、かつてお世話になった先生に、たとえば中学校や小学校、あるいは塾の先生に、年賀状の一通も、あるいは近況の報告の一回でもすれば、彼はなかなかよくできた子どもだなと言われるわけです。この中に担任の先生に年賀状を出している人そんなにいないのではないかな。もし出しているとすれば、それはたいしたものです。そういう話なのです。

もう塾の先生の話は、前のことであって今は関係ないというふうに思っているのなら、先生をほったらかしにしているのですね。お世話になったのにね、現実はそのようなものです。ところが校祖は、先生が亡くなった後も、また自分が死んだ後も今の学園長に引き継いでもらって、その師匠に対する感謝の気持ちを忘れずに、春と秋に供養し続けてこられたのです。

この行いは、その師匠はもちろんのことですが、同時に弟子の値打ちも上げることになります。自分はこれだけのことができる人間であり、これだけの信頼を師匠に示すことができている、またゆるぎない感謝の念をずっと持つことができているというふうに。

この姿は、やはり安心と尊敬と信頼のできる人間であると言えるのではないかと思います。私たちが、学ばなくてはならないというのはそこです。なかなかできることではありません。そういう意味で継続することは難しい。しかし、継続できている裏にあるものは、お世話になった人に対する感謝の気持ちです。それがずっと亡くなった後も続いているのです。そのこと自体が、その人のスケールの大きさと言いますか、あるいはその人間の信念と言いますか、そういうところを示していて、我々はそれを学び知ることができるのです。

ですから、僕らは学ばなくてはなりません。そうでしょ。今も言いましたが、塾の先生に挨拶に行った人が何人いますか。あまりいないのではないかな。中学校や小学校の先生に挨拶に行った人が何人いますか。ほとんどの人

がもう忘れていてのではないですか。そうでしょう、そんなものです。しかし、亡くなった後もずっとその感謝の念を持ち続けて、お供養を継続していく。ということは、そのただならぬ信念で感謝の念とご恩を忘れていないということなのです。これはやはりただ事ではありません。ここに学ばなくてはなりません。

もちろん、師匠が偉かったということもあります。そういう意味でなら諸君たちも、自分の師匠、自分の人生の芯になる先生を見つける必要があります。僕にはそんな師匠がいますけれども。

諸君たちにとって大切な先生に出会ったのなら、そのことを忘れないようにしなくてはなりません。そして、先生を大切にすることというのは、師匠の値打ちを上げるだけではなくて、師匠を大切に思い続けている弟子の信用、弟子の値打ちも上がるということをおぼえておきなさい。

先生をきちんと立て、先生に対してお世話になったことと、その恩を忘れないようにする。それは先生の値打ちを上げるだけではなくて、その人間そのものの値打ちを上げる。絶対にそうです。きちんと挨拶に行く。きちんと報告に行く。それだけで、実はたいしたこと、たいした人間なのです。

学園長は、秋と春、江間俊一のお供養を校祖から引き継いで続けておられます。今はその校祖の供養も、そして諸君たちの先輩のなかで亡くなった先輩、あるいは亡くなった先生方のお供養もしています。こういう精神、自分の師匠に対してその感謝を忘れないという精神、つまり継続する精神のなかに、その弟子の方の精神も感じられるのです。

このことから諸君たちはぜひ学んでほしいと思います。お世話になった人の恩を忘れない。報恩感謝の念をずっと持つということは、先生に対するお返しでもあるけれども、その人間自体が、安心も尊敬も信頼もできる人間だということであり、その人自体の輝きを増すことになるのです。

この校祖の姿勢から、ひとつ学ぶことがあると思います、昨日100回目のお供養でしたので、学園長もお話になりましたけども、それに加えてお話させていただきました。今朝の話はこれで終わります。

(学校長)